

批判的合理主義研究

# Studies in Critical Rationalism

2024

Vol. 15, No. 1

日本ポパー哲学研究会事務局機関誌編集部

(2024 年 7 月号)

## CONTENTS

### <第 34 回年次研究大会自由論題発表要旨>

学習におけるエラーの働き：記憶の実験心理学からの示唆 岩木 信喜 2

### <第 34 回年次研究大会シンポジウム：「AI と認識論：技術・知識・社会の共進化」：発表要旨>

生成 AI と世界 3 蔭山 泰之 5

生成 AI を理解できるか？ 永島 秀文 6

法的シンギュラリティ 宇佐美 誠 7

### <投稿論文>

カール・ポパーはなにを語ったのか——最近の日本共産党の立場との関連で—— 小河原 誠 8

### <その他>

第 34 回年次研究大会のご案内 16

## ＜第 34 回年次研究大会自由論題発表要旨＞

### 学習におけるエラーの働き：記憶の実験心理学からの示唆

岩木信喜（聖学院大学）

#### 1. 問題の所在

ヒューム（2004、2010）は、帰納が論理的には成り立たないことを論証したが、同時に、事実として人間は帰納的に思考していると言える理由も説明した。ポパー（1974）は、前者をヒュームの論理的問題、後者を心理学的問題として区別している。本報告では、後者の心理学的問題に関するヒュームの仮説に焦点を当て、記憶の心理学実験で得られた事実に基づいて吟味することにする。

人が帰納的に類似事象の生起を期待するとなぜ言えるのであろうか。この問いに対し、ヒューム（2004、p.212）は「習慣のみが、あらゆる事例において、未来が過去に合致すると想定するようにと、心を決定するのである」と述べる。つまり、ヒュームは反復経験に基づく習慣を通じて自然の斉一性原理が学習され、その原理に立脚することによって帰納的に知識あるいは観念連合が形成され则认为している（ヒューム、2004、pp.211-212）。また、習慣は知識の確実性の認識を導くことが、因果関係の認識に言及するところで述べられている。すなわち、「一つの特定の種類の出来事が、あらゆる事例において、他の種類の出来事とつねに接続しているとき、...われわれは、一方の対象を『原因』、他方の対象を『結果』、と呼ぶ。一方の対象のうちには、それが間違いなく他方を生み出し、最大の確実性と最強の必然性をもって作用するための何らかの力があると、そのように想定する」（傍点原文のまま。ヒューム、2004、p.67）。したがって、ヒュームは、人における事実として、繰り返し

に基づく習慣形成が確実性の認識を導き強めると仮定している。

さらに、ヒュームにおいては、類似印象の繰り返しによって信念が形成される。信念は、「現在の印象と関係を持つ、すなわち連合する生き生きとした観念」（ヒューム、2010、p.61）であり、「いつも印象にひき続いて起こるものを経験するうちに、やがて印象が信念のもとをなすものになる」（同書、p.65）。したがって、信念は、類似印象の繰り返しによって強い確実性を伴うようになった観念連合である。それゆえ、「いろいろのものごとについて幼時から習慣づけられてきた意見や考えは、いずれも深く根ざしていて、理性や経験のどんな力をもってしても根だやしするのは不可能である。この習慣の影響は、原因と結果の恒常的な、分離しがたい結びつきから生じる習慣に近いというだけにとどまらず、これをしのぐ場合も多いほどである」（同書、p.74）と考えられている。このように、ヒュームにおいては、習慣の影響によって、信念としての意見や考えは安定したものとなり、変更されにくくなると仮定されている。

ヒュームの解釈は次のようにまとめられる

(1) 反復経験によって自然の斉一性原理が学習される。(2) 帰納は自然の斉一性原理を前提とする。(3) 反復経験は知識の確実性と安定性の両者を強める。本報告で注目するのは(3)である。ただし、筆者の知る限り、反復経験が知識の確実性と安定性の両者をつねに強めるのかどうかについて、心理学領域で包括的に検討した研究は見当たらない。そこで、反復経験による知識をもう少し広くとらえて、経験に基づく知識とし、その確実性認知（確信度）と安定性（記憶固定化による変更の困難さ）に関する以下の仮説を検討する。(1) 確信度が高い知識ほど、そ

れが誤りであったときに正答フィードバックによる矯正が難しい。(2) 誤った知識が忘却された場合よりも憶えている場合の方が記憶は固定化されているので、正答フィードバックによる矯正が難しい。(3) 誤った知識の忘却を促すと、正答フィードバックによる矯正が容易になる。

## 2. 仮説検証

2-1. 確信度が高い知識ほど、それが誤りであったときに正答フィードバックによる矯正が難しいか？

心理学では、手がかり情報に対して別の情報を関連づける学習のことを対連合学習という。また、経験を通じた知識の修正は、先行学習の記憶が後続学習で得た知識で置換されることであり、次のように整理できる。手がかり A に対して C を連合させるべきところ、それに先行させて A に B を連合させたとする。このとき、A に対する B の連合が先行学習であり、B を C に置換する作業が後続学習である。先行学習の後続学習に対する阻害作用があるとき、これを順向干渉と呼ぶ。ヒュームの主張は次のように換言できる。手がかりとしての問題 (A) に連合しているある回答 (B) の主観的正しさの程度、すなわち、確信度が高いほど、別の情報 (C) への置換が阻害されるはずである。

確実性が強く感じられる知識は根強いいため、たとえ誤りであっても矯正されにくいという仮説に直接的に関連する研究がある。

「hypercorrection effect of high confidence errors (高確信度エラーのハイパーコレクション効果)」と呼ばれる現象を扱った Butterfield & Metcalfe (2001) の研究である。彼らの実験では参加者は一般的知識に関する問題に回答し、同時に、回答の確信度も推定することが要求され、そのあとで正答が呈示された。ヒューム仮説によれば、高確信度のエラーは根強いので、低確信度エラーよりも修正されにくいはずであ

る。しかし、実験結果は逆であり、高確信度エラーは低確信度エラーよりも修正されやすかった。この結果は、ヒュームの仮説に否定的である。

2-2. 仮説検証 2 : 誤った知識が忘却された場合よりも憶えている場合の方が記憶は固定化されているので、正答フィードバックによる矯正が難しいか？

Iwaki, Takahashi, & Kaneko (2024) は漢字読み課題を使ってこの点を検討した。参加者は漢字熟語 (A) の読み方 (B) を回答し、確信度も評定した。そのあと、正答 (C) をフィードバックされた。エラー試行では A-B ペアを A-C ペアに置換しなければならない。この課題を行った後、5 分間の挿入課題をしてから最終テストを実施し、さらに、初めの課題のエラーも想起させた。結果は予想の逆であり、誤りを想起できた試行の方ができなかった試行よりもエラー修正率が高かった。この結果もヒュームの仮説に否定的である。

2-3. 仮説検証 3 : 誤った知識の忘却を促すと、正答フィードバックによる矯正が容易になるか？

ヒュームの仮説から、誤った知識の記憶の固定化レベルを低減すれば、別の知識に置換されやすくなるはずである。つまり、正答 (C) が経験される前に置換されるべきエラー (B) の忘却を促しておけば、順向干渉の低減によって C の学習成績が向上すると考えられる。この予想について、Iwaki, Nara, & Tanaka (2017) は漢字熟語の読み課題を用いて検討した。参加者の課題は Iwaki et al. (2024) に基本的に同じであるが、正答フィードバックを与えるタイミングを操作した (回答直後に与える直後条件 vs. 一週間後に与える遅延条件)。遅延条件ではエラーの忘却傾向が生じるので、それに応じて順向干渉が低減される結果、最終テストのエラー修正率

が改善されるはずである。しかし、この予想に反して、エラー修正率は改善されなかった。

### 3. まとめ

心理学実験の主要な結果は次のとおりである。(1) 誤った知識は確信度が高いほど根強いと仮定したが、正答フィードバックによる矯正が低確信度の誤りよりも容易である。(2) 誤った知識が忘却された場合よりも憶えている場合の方がその記憶はより堅固と仮定したが、正答フィードバックによる矯正が実際には相対的に容易である。(3) 誤った知識の忘却を促すと順向干渉レベルが低減すると仮定したが、正答フィードバックによる矯正が実際には容易にならない。これらの事実はすべて順向干渉に基づく予想に反するものであり、したがって、人の帰納的思考の存在を説明するヒュームの仮説にも不利な結果と考えられる。

### 【文献】

1. Butterfield, B., & Metcalfe, J. (2001)

Errors committed with high confidence are hypercorrected. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 27, 1491-1494.

2. ヒューム, D. 斎藤繁雄・一ノ瀬正樹 (訳) (2004). 人間知性研究 付・人間本性論 摘要 法政大学出版局.

3. ヒューム, D. 土岐邦夫・小西嘉四郎 (訳) (2010). 人性論 中央公論新社.

4. Iwaki, N., Nara, T., & Tanaka, S. (2017) Does delayed corrective feedback enhance acquisition of correct information? *Acta Psychologica*, 181, 75-81.

5. Iwaki, N., Takahashi, I., & Kaneko, S. (2024) How does error correction occur during lexical learning? *Psychological Research*, 88, 1272-1287.

6. ポパー, K. R. 森博 (訳) (1974). 客観的知識—進化論的アプローチ— 木鐸社.

## 生成 AI と世界 3

蔭山泰之（日本 IBM）

大規模言語モデル（LLM）にもとづく最新の生成 AI は、これまで人にしかできないと考えられていた文脈に応じた高度な判断や創造性豊かな創作などをこなし、驚くべき成果をあげてきている。生成 AI は、AI の第二世代までのルールベースの仕組みではなくて、第三世代以降のディープラーニングに基づいているが、その言語モデルが大規模化したことで、もうすでに第四世代の AI と言ってよいほどの革新性を備えている。生成 AI は、既存のどのテクノロジーよりも人類に影響を及ぼす可能性を秘めているのである。

現在ではこのような可能性について、さまざまな論者がさまざまな立場から、生成 AI の意味やその将来について、さまざまな意見を述べている。だが、その進歩もこれまでのテクノロジーでは見られないほど急速であり、もう明日にはまた画期的な成果が得られているかもしれないほどなので、今日、生成 AI について論じたことも、明日には成り立たなくなっている可能性もある。

さて、批判的合理主義を提唱したポパー思想の観点から見ると、このような生成 AI は、人間が生み出した者であるにもかかわらず人間からは独立した客観的な存在であって、独自に進化し続けているという点で、典型的な世界 3 の住人であると言ってもよいだろう。

ポパーによれば、物理的世界である世界 1 と

心的世界である世界 2 に対して、この世界 3 には、客観的知識、客観的な知的構築物の世界としてさまざまな特徴が備わっているが、果たして生成 AI は、どこまで世界 3 の観点から論じることが出来るだろうか？世界 3 の観点から見たときに、それがわれわれ人間にとってどのような意味をもち、人間の将来にとってどのような方向に発展していくと予想されるのだろうか。

また、以上の見方とは逆に生成 AI の観点から見たときに、世界 3 は世界観としてどのような意義をもつと言えるのだろうか。というのも、ポパー思想の中では後期に位置づけられる世界 3、三世界論は、これまで、初期の反証可能性や中期の開かれた社会とはあまりにもかけ離れた形而上学説とされ、ポパーの思想の中では特異な変異的存在と見なされているように思われるからである。

しかし、生成 AI のもつ世界 3 の住人としての特徴を考察してみると、そこにはポパーの初期、中期、後期の思想を統一的に解釈するためのカギが含まれているように思われる。このように、生成 AI の登場によって、改めてポパーの思想に新たな光を投げかけることができるのである。

報告では、まず、現在の生成 AI の技術的な特徴を概観したうえで、その核心と考えられる部分を明らかにする。次いで、最初に世界 3 からみた生成 AI の特徴と意義を論じる。そして最後に、今度は生成 AI から見た世界 3、三世界論の意義を論じ、初期、中期、後期のポパーの思想の統一的な解釈、つまりポパーの思想を一貫して貫く核心部分に迫っていきたい。

## 生成 AI を理解できるか？——大規模言語モデル(LLM)のエンジニア観点での理解——

永島秀文 (TÜV Rheinland)

ChatGPT に代表される生成 AI、あるいは大規模言語モデル (LLM) が社会現象となっている。

LLM の特徴とモデルの位置づけを概括してから、その人工知能への哲学的な批判とその解釈からの理解を試みる。

生成 AI の理解という問いは大きな問いである。そのため、次のような順序で論じる。

1) 人工知能研究の世代を整理する。初期の草分け時代から始まり、深層学習と生成 AI までの 4 世代に分類する。汎化のミステリーについても触れる。汎化とは学習データを超えて未知のケースについても高い精度を示すことである。

2) 生成 AI、とくに LLM 理解へのアプローチを説明する。LLM は機械翻訳が元々の使用目的であり、その本性は次の単語を予測する確率モデルである。

3) チューリングテストはエンジニアリング的な理解の基準になりえる。LLM が行っていることへの抽象化した思考実験として適切であると考えられる。

4) 「中国語の部屋」についての概説。そのチューリングテストへの 1970 年代の批判「中国語の部屋」は哲学的な観点で興味深い検討視点を

を提供している。

5) 中国語の部屋の中で使われるマニュアルは中国語を解さない人間によって使われる膨大な情報の集積物になる。このマニュアルはそれ自身が考究に値する。それが包含する情報を考察すれば、当該マニュアルは万有マニュアルとして扱うことになる。万有マニュアルの構成の仕方によっては、それを LLM の素朴なモデルと見なせる。

6) 「中国語の部屋」への認知科学者の批判である「記号接地問題」は人間と LLM の違いについての初期の指摘であると思われる。

記号接地問題を踏まえた人間のコミュニケーションの構造から、LLM が行っている模倣の特性を議論するのに役立つだろう。

以上のまとめとして、人間の言語的コミュニケーションと LLM の対応を比較した。

組織の人事や裁判など人間性に関わる意思決定において、この相違点が両社の判断の差異となる可能性がある

最後になるが、現在の LLM に代表される技術的ブレークスルーは極めて大きな影響力を持つとされる。

そのリスクを含めて幅広い分野で LLM の利用原則とインパクトについて論議し、適正な運用を実現することが望ましい。

可能であれば、汎化についての意味論的な解釈についても触れたい。

## 法的シンギュラリティ

宇佐美誠（京都大学）

人工知能（AI）を取り巻く法的諸論点は、3つに大別できると思われる。第1は、私が「AIへと適用される法」と呼ぶ論点群である。ここでは、AIをめぐる新奇な事例にいかなる現行法または新たな法が適用されるべきかが問われる。第2は、「AIで適用される法」と呼びうる論点群である。これは、司法過程において、裁判官が事実認定や法的推論を行う上でAIを利用する場合に生じうる諸論点をさす。さらに進んで、AIが裁判官に代わって判決・決定・命令を下すか、あるいは裁判官がAIによる判決等の提案に原則的に従うという状態が現出するならば、第3の「AIにより適用される法」という論点群が立ち現れる。ヨーロッパ諸国の一部、北米諸国、中国等には、AIで適用される法の事例は元より、AIにより適用される法に近似した事例さえも、すでに散見される。本報告では、AIにより適用される法を取り上げる。

AIにより適用される法に属する1つの主要論点は、法的シンギュラリティをどのように評価するかである。法的シンギュラリティとは、AIが平均的裁判官よりも優れた司法的決定を行う可能的状態だとここでは定義したい。その規範的評価をめぐっては、国際学界において、司法的決定の不確実性の著しい低減などを予見する擁護者と、法の支配への違背などを非難する批判者の間に、見解の対立が見られる。だが、法的シンギュラリティを的確に評価するためには、

そもそも事実・規範の認識においてAIと人間はいかなる点で異なるかという基礎的論点に立ち返る必要があると思われるにもかかわらず、この論点の考察はいまだ乏しい。また、AIによる不確実性の低減は厳密にはいかなる機能であるか、AIは公正の促進などの他の機能をもちうるか、さらにAIの利用が違背すると主張されるとき法の支配の理解は的確であるかなど、精査すべき論点は少なくない。こうした研究状況の種々の限界を踏まえて、本報告では、法的シンギュラリティの認識論的特徴を確認した上で、司法過程におけるAIの利用がいかなる機能を果たしうるかを探究し、そして法の支配の観点からこの利用はいかに評価されるかを検討する。

本報告は、初めにAIをめぐる諸論点の三分法を提案した上で、AIにより適用される法の海外での実施例を寸描する。次に、法的シンギュラリティを定義した上で、その評価をめぐる学説対立を概観し、現在の研究状況の限界を指摘して、本報告の目的を提示する。予備的作業として、AIの情報処理と人間のそれとの間にいかなる認識論的相違があるかを確認する。これを踏まえて、司法でのAIの利用がいかにして不確実性を低減し、公正を促進しうるかを考察する。続いて、法の支配の的確な解釈の下で、AIの利用はいかに評価されるかを検討する。最後に、法的シンギュラリティという主題がもつ意義を指摘する。

## カール・ポパーはなにを語ったのか——最近の 日本共産党の立場との関連で——

小河原 誠

とにかくポパーはいやな奴？

旧冬 2023 年 12 月 12 日付『赤旗』の「文化学問」欄は、共産党の出版局長という田代忠利氏による、カール・ポパーの『開かれた社会とその敵』（岩波文庫全 4 冊）にかんする文章を掲載した。（筆者は、訳者ではあるのだが、あえて書評とは呼ばない注 1。）これを読むと、氏はポパーにかなり憤慨したと見える。要するに、マルクスはこの著の副題にあるような「にせ予言者」として非難されてはならないということらしい。

しかし、お聞きしたいが、マルクスは資本主義の運命について予言したのではないか。そして、そこにマルクスの巨大な影響力の秘密があったのではないか。そして、その予言は大ハズレだったのではないか。（たとえば、どこにおいても国家は死滅の兆候など示しておらず、むしろ肥大化の傾向を示している。）

さらに、私の読後感を語らせてもらうと、どうも田代氏にとってマルクスは暴力的な革命家であっては困るようであり、平和的で人道主義的な改良主義者であらねばならないようだ。だから、ポパーが描き出したようなマルクス像——田代氏はこれをただしくとらえたであろうか——は、否定されねばならないのだろう。

しかしそれは、歴史上のマルクスを現在の共産党の路線という型枠のなかに流し込み固めてしまうことではないのか。この型枠をぶち壊す解釈を語るポパーは徹頭徹尾否定され

ねばならないようだ。しかし、それは過去思想家としてのマルクスに対するただしい向き合い方なのであろうか。

ポパーがこの書物で語ったことは、日本共産党の現在の路線に照らせば、否定するどころか大いに学ばねばならないはずものだ。それは、ヒストリシズム（歴史の必然性信仰）を否定する議論であり、ピースミールな改良主義の擁護であり、解職主義的な民主主義論の提唱であり、「ブルジョワ国家の本質とは……」などという本質論を否定してわれわれは国家になにを要求すべきかを説く保護主義的な国家論などである。ここに、日本共産党にとってのジレンマが生じるように見える。

つまり、田代氏は律儀にマルクスの正統的な「継承者」であると自己主張しようとしているので、「マルクス批判者」たるポパーを、またかれの描くマルクス像を否定しなければならないと考えるのであろう。だが氏は、他方でポパーの民主主義論や改良主義を否定してはならず、学ばねばならないという難しい課題の前に立たされたということだ。

ポパーによるマルクス歪曲？

その 1 追加

ところが、この課題は田代氏には荷が勝ちすぎた。ここで氏がとったスタンスはきわめて単純で、ひとことで言えば、ポパー的なマルクス解釈は否定して、マルクス継承者であるという自分の立場をもっともらしく見せかけるとともに、他方で、ポパーの改良主義的な政治哲学は読者（とくに共産党支持者）の目に触れさせないようにすることであった。換言するとポパーなぞ相手にしなくてもよいという先入見を読者に植えつけることであった。し

かし、これは、普通に言えば、「ポパー歪曲」と呼ばれることだろう。

しかし、氏はその論評を手短な分量にまとめたとはいえ、お手並みは鮮やかとはいかず、あちこちほころびが目立つ。以下では順次それらを指摘していこう。氏は、まずポパーの理解ではマルクスは初期には「能動主義」者であったが、のちには予言者にされたと言い、それに伴って人間は「操り人形」にされてしまったと「要約」してつぎのように言う。

「彼〔ポパー〕の議論の特徴は、社会発展の法則性と人間の能動性を対立させること、マルクスの引用で、自説に有利になるよう言葉を追加、または省くことです。」

このパラグラフにおける最初の言い立て〔法則性と能動性の対立〕は後半で論じることにして、引用の仕方に問題がある〔不当な追加と省略〕という残りの主張のうち、まず意図的な追加なるものを取り上げてみよう。氏はつぎのように主張している。

〔ポパーは新しい社会の到来にかんして〕

「政治にできることは『産みの苦しみを短縮し緩和する』ことでしかない」と傍線部を付け加えて、マルクスは人間の役割を軽視したと読者を誤導しています。」

「傍線部を付け加えて」という氏の発言を聞くと、ポパーが意図的にマルクスを歪曲したように聞こえる。しかし、確認しておきたいが、ポパーが引用したのは、二重括弧でくくられた部分のみである。「でしかない」というのは、ポパー自身によるマルクス評価（あるいは解釈）のことばである。決してマルクスのことばそのものを歪曲しているわけではない。そも

そも引用者が引用した語句に対して態度表明をしてはいけないのだろうか。むしろ、文筆の世界では普通になされていることではないか。たとえば、『……』という愚かな表現でしかない」といった表現は普通になされていることではないか。田代氏はそれを大仰に騒ぎ立てるにすぎない。片々たる一字句をもって読者を誤導しようというのは「国際的に有名なマルクス批判者」ポパーの影に怯えすぎたのではないのか。田代氏はそもそも「論評する」という行為を理解していない。

## その2 省略

つぎに田代氏が不当に省略したとしてポパーを譴責したのは、マルクスが「変革では政治などでの人間の意識的なたたかいが決定的」と語っているという一文（文法的には関係文（修飾文））にかんしてである。田代氏の論評をすでに読まれた読者には煩わしいであろうが、話の流れをきちんと理解していただくうえからも、議論を再構成しておきたい。

田代氏が言及したのは、『『経済学批判』序文』の一節——以下では【序文の箇所】と略記——である。氏によれば、その箇所はマルクスが人間の主体性・能動性を強調している重要な箇所であったにもかかわらず、ポパーはまさにそれを省略することで、マルクスにおける政治の強調（人間の役割の重要性）を無視したのだという。田代氏はポパーが引用したままの形でその箇所をつぎのように提示している。

「このような変革を考察するにあたっては、経済的な生産諸条件において科学に忠実に確定されるべき物質的なものの変革と、（＊）法律的、政治的、宗教的、芸術的、哲学的、つまりイデオロギー的な形態とをつねに区別しなければならない。」

田代氏がポパーの省略した箇所であるという(\*)の箇所とは「人間がこの衝突を意識するようになりこれとたたかって決着をつける場となる」〔この訳文の出典は明示されていない〕という文である。

ここで話を中断するようで申し訳ないが、先に進む前に、いま議論している【序文の箇所】が別種の翻訳ではどうなっているかを見ておきたい。読者には、マルクス解釈の微妙な差異を感じとっていただきたいと思うからである注2。一つは以下の岩波文庫版である。

「このような諸変革を考察するさいには、経済的な生産諸条件におこった物質的な、自然科学的な正確さで確認できる変革と、(\*\*)法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、つづめていえばイデオロギーの諸形態とをつねに区別しなければならない。」(引用は13ページ以下)。そして(\*\*)の箇所は、この岩波文庫版ではつぎのようになっている。

「人間がこの衝突を意識し、それと決戦する場となる。」

ついでながら、この箇所についての、意味的には大きな違いあるわけではないが、筆者の訳も載せておこう。

「人間がこうした衝突を意識するようになりそれと決着をつける場となる」(Marx Engels Werke, Bd. 13, S. 9. ついでに省略されたという関係文も引いておく。worin sich die Menschen dieses Konflikts bewußt werden und ihn ausfechten.)

さて、田代氏によればポパーが意図的に省略したという(\*)の箇所こそが決定的に重要

なのであるという。では、ポパーはこの箇所を意図的に省略したのであるだろうか。もちろん、結果的には省略されているのであるから、それは「意図的」だったのだという主張は成立するであろう。だが、別種の可能性は存在しないのか。存在するとすれば、それはどのような可能性であろうか。

ポパーのテキスト(ドイツ語版)にさかのぼってみると、(\*)の箇所はきれいさっぱり削除されており、しかも文章はプンクト[ピリオド]で終了している。しかしながら、英語版のほうに目を移すと、この箇所は2連のピリオドで省略がなされていることを明示している(Routledge, Golden Jubilee Edition p. 338)。

ドイツ語版は、ポパー自身が監修したということなのだが、筆者はポパーの側(ポパーと協力者)のミスではないかと思う。あるいはポパー自身が関係文は重要でないと判断して意図的に省略したというのが、この箇所についてのより公正な評価ではないかと思う。

しかし、それは田代氏が主張するように、マルクスの本来的な意図(「人間の意識的なたたかいが決定的」ということ)を歪曲するためになされたのであろうか。そして結果として「この文は、変革では政治などでの人間の意識的なたたかいが決定的という意味ですから、彼〔ポパー〕の解釈は無理です」という田代氏の主張を立証するのであろうか。

筆者はそうは思わない。なぜなら、第一にこの箇所はたんに副文にすぎず、文の構造からすれば主文に対しては副次的な重要性しかもたないからである。マルクスの主眼は、経済的な生産諸条件とイデオロギーの諸形態を区別し、そして前者が下部構造として根本的な条件で

あり、後者はそれを反映する上部構造にすぎないと論じているからである。もう少し詳しく論じてみよう。

問題の箇所には先行する一連の行文はいわゆる(史的唯物論の)公式を語っている箇所として有名であるが、そこにはつぎのような表現(定式)が見られる。

「この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、……そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している。物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的生活諸過程を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである。」(岩波文庫版、13 ページ。傍点は本稿筆者。)

また当該箇所のあとの部分にはつぎのような表現も見られる。

「……この意識を、物質的生活の諸矛盾、社会的生産諸力と社会的生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない……また新しいより高度な生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化しおわるまでは、古いものにとってかわることはけっしてない。」(上掲書、14 ページ)

ここに引用した諸表現は、普通に解釈するならば、反映論を語っているものであろうし、人間の側の主体性・能動性には強い制限がかかっているという主張であろう。なるほど、「人間の意識的なたたかいが決定的」という言い方はいつでも可能であろうし、じっさい、多くの人は戦いにおいては、自分が何をして

いるのか、どんな相手と戦っているのかを意識するであろうから、その意識が大切であるとは言えるよう。

しかし、それはマルクスの史的唯物論からすれば、「人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定する」のであるから、「意識」とそれにもとづく能動性や主体性は、当時のマルクスにとっては「決定的」ということではなかったと言えよう。「決定的」であったと解釈するのは、田代氏が現在の日本共産党の路線の正当性を根拠づけようとしてそう解釈しているにすぎないのであり、それは歴史的人物としてマルクスを歪めることではないのか。マルクスの史的唯物論の観点からすれば、「その物質的な存在諸条件が古い社会の胎内で孵化しおわるまでは、」意識的なたたかいが「古いものにとってかわることはけっしてない」ということになりはしないか。要するに、「人間の意識的なたたかい」は「生産諸条件」によって規定されてしまうのだから、「決定的」ではなく、「二次的」ということになりはしないのか。

筆者には、田代氏は片々たる一文をもって史的唯物論の公式(ここでは、反映論および存在が意識を規定するという主張)を覆そうとしているように見える。しかし、そうするには、再度言うが、典拠はあまりにも薄弱なのではないだろうか。大力無双の力士であっても、地盤が泥田のように脆弱であっては、暴れるだけ沈み込んでいくのみである。

#### 暴力行使の両義性問題

氏は、マルクスは反映説を語っているのかもしれないという疑念はおくびにも出さず、ポパーに対する攻撃をつづけていく。ポパーの解釈では、マルクスは資本主義下における人

間を経済の操り人形にしたことになるという——しかしこれは、俗流マルクス主義者の解釈であるとしてポパー自身がきびしく批判している当のものである。『開かれた社会とその敵』の第一四章を参照されたい。ついでながら、そこでは、マルクスは人間を傀儡と解釈するのではなく、制度論的に解釈しているとして高く評価されている注3。] それどころか、ポパーのマルクス解釈では、マルクスは議会をつうじての改革の可能性を無視した暴力的革命主義者にでっち上げられている、という。

こうした田代流のマルクス解釈は、驚くに値するものではない。マルクス主義の歴史を少しでも学んだことある者なら、マルクス主義が暴力の使用にかんして少なくとも理論的には両義的な(あいまいな)態度をとってきたことは明白だからである。(これは、わかりやすく言えば、敵の出方次第論とでもいえよう注4。)そしてポパーはこのあいまい戦略をマルクス主義におけるもっとも有害な要素とまで言っている。だが、これは、注意してもらいたいのだが、田代氏が言うように、マルクスを一貫した暴力的革命論者とするわけではない。その証左としてポパーからつぎの箇所を引用しておきたい。

「過激派は、マルクスにしたがって、あらゆる階級支配は必然的に独裁、独裁政であると主張する。したがって、真の民主主義は、階級なき社会を樹立することによってのみ、すなわち、必要とあれば暴力をもってしても資本主義的独裁を排除することによってのみ達成されることになる。穏健派は、この見解には賛同せず、資本主義下でも民主主義はある程度まで実現可能であり、漸進的な改革をつうじて平和的に社会革命を起こすことができると主張する。だが、この穏健派でさえも、そのよ

うな平和的発展は不確実であると考え。そして、そうしたばあい、ブルジョア階級は、民主主義の戦場で敗北の危機にさらされるとまちがいなく暴力的手段をとるだろうと指摘する。そしてこの派は、こうしたばあい、労働者が同等の報復をし暴力を用いてみずからの支配を打ち立てても正当であると考え。両派は、マルクスの真のマルクス主義を代表していると主張するわけであるが、ある意味では両派ともただしい。なぜなら、すでに言及したように、こうしたことがらにかんするマルクスの見解は、そのヒストリシズム的なアプローチのゆえにあいまいであったからである。くわえて、かれは生涯のあいだに見解を変えたようにも見える。つまり、最初は過激派として出発し、のちには穏健派の立場をとったのである。」(岩波文庫版第2巻上、第19章第3節、p.322f.)

ポパーの解釈では、マルクスあるいはマルクス主義は暴力の使用にかんして体系的にあいまいなままであったのだ。さらに後年になって、かれは穏健派に移ったとも主張されている。だとすれば、一貫して暴力的革命論者だったなどとは言えるはずもない。ポパー自身はそのことを熟知していた。

マルクスを一貫した暴力的革命論者としたのでは、両義性を一義性に貶めることになり、かれにおける平和主義的漸進的改革路線がまったく見えてこないであろう。筆者は、論証は省くが、こうした点は『開かれた社会とその敵』を読んでみれば明白であると思う。この本は、改良主義との共鳴を示す本であって、それをマルクスのうちにも探ろうとしている本なのだから。筆者は、田代氏はポパーの議論をそもそも読み解けていたのかと疑う者である。

ところで、田代氏はさらにマルクス弁護をつづけている。その1。曰く「社会主義が必然とは、いずれは到達するという意味です。」筆者はこれを読んだとき思わず吹き出してしまった。マルクス主義は「科学的」マルクス主義であることを標榜していたはずである。田代氏のこの言明は、科学とはまったくなんの関係もないだろう。それは、「いずれ、雨が降る」とか「いずれ、地震が到来する」といった存在言明とおなじく、いつかは真なることが証明されるというまったく空疎な言明でしかない。

科学的予測言明として価値があるのは、存在言明ではなく、明確に時と所を限定した単称言明（ポパーのことば遣いでは基礎言明）である。この点は、近年における科学哲学の興隆によって周知の事項になったのかと思っていたが、どうもそうではないらしい。田代氏は、科学哲学の成果をまったく理解していないのだ。いつでも言い逃れが可能な「革命はいつかは来る」という存在言明に引き下がっている。日本共産党の有力メンバーであろう人物のこうしたお粗末な科学理解では、共産党は相手にされなくなっていくだけだろう。

その2。田代氏は、『陣痛の短縮・緩和』とは、人間が歴史の発展法則に沿って社会に働きかければ、変革が短期間で円滑に進むことの比喩です」と言う。筆者はこれを読んだとき思わず涙がこぼれ落ちそうになった。マルクスは生涯をかけて「比喩」を語るために研究していたのだろうか。マルクスは、将来の社会の変化を科学的に「予測」——「予言」ではない——しようとして研究していたのではないか。田代氏が、マルクスの表現を「比喩」に貶めてしまうならば、マルクスは社会学者というよりは、象徴派の詩人にでもなってしまうのではないか。マルクスを社会学者として扱

おうとするなら、マルクスの諸言表をより反証可能性のより高いものとして扱う必要があるだろう。田代氏は、筆者には、まったく逆向しているように見える。

もう少し批判をつづけたい。その3。氏は、「人間が歴史の発展法則に沿って社会に働きかければ……」と書いておられる。これはいったいどんな意味なのだろうか。「歴史の発展法則」とは、氏は詳しく説明してはいないのだが、こうしたことを主張する人たちの通例からすると、AのあとにはBが、そのあとにはCが、またそのあとには……という継起の法則のことではないのか。とすれば、これもまた科学に対する無理解ぶりを示すものであろう。というのも、事象の継起は、先行する出来事がある法則——これ自体は継起の法則ではない——の初期条件となってある出来事、つまり結果を惹き起こし、それがまたある別な法則の初期条件となって、べつの結果を惹き起こすということであって、継起の法則などを引き合いに出す必要はなく説明されることなのだ。

その4。しかるにマルクスに倣って「この社会は、自然の発達段階を飛び越えることもできなければ、これを法令で取除くこともできない」（岩波文庫版『資本論』第1巻16ページ）などと言うのは、「歴史の発展法則」は鉄の必然性をもって貫徹するなどと信じ、数限りない害悪を流したヒストリシストの典型的な言い草である。そしてポパーはまさにこの点を批判したのである。田代氏は、これをまったく理解していない。『開かれた社会とその敵』を後ろから、つまり歴史叙述の論理というべきものが書かれている第25章から丁寧に読まれることをお勧めせざるをえない。

ところで、氏は「発展法則に沿って」とも述

べておられるが、「発展法則に沿う」とはいかなることなのであろうか。人間の知識は「成長」する。科学技術の進歩は昨日できなかったことを今日には可能にする。ところが、知識の成長を「予測」すること不可能である。なぜなら、明日になって初めて知ることを今日のうちに知ることとはできないからである。発展法則に沿おうとしても、それ自体が人類史に登場した幾多の神話や謬説のように発展して消滅してしまうならば、寝言になってしまう。

さらに田代氏の主張——むしろ、信念とでもいべきもの——には、問題がある。それは、われわれは「発展コース」なるものを受け容れるべきか、拒否すべきかという倫理的問題が見えなくさせられてしまうという問題である。

たとえば、われわれは「発展法則に沿うとして」アマゾンの密林を伐採しつくしてしまうべきなのか、それとも地球の肺としてのそれを守り抜くべきなのか。発展法則は事実言明であるから、そこから価値的（倫理的）言明を引き出すことはできない。

大事なのは、「発展法則」などではなく、人間の側の考え抜かれた実践的な意志を世界の側に課していくことなのだ。人類史は理想社会の実現という目標達成に向けて進んでいくというかたちで事実と価値とを混淆しているゆえに、すでにして価値を折り込んでしまっている「法則」なるものの奴隷となると、スターリニズムのもとでの隷属以上の隷属が生じるであろう。

結局のところ、「発展法則に沿う」という言表は、まったく空疎であり、危険である。とはいえ、それは権力を握った者（たとえば、党の指導者）には、勝手な解釈のもとで、自分たち

にとって都合のいい「意味」をぶち込んでいくことができる便利な道具となるのだ。結果として、無辜の多くの人びとが収容所で、あるいはシュタージといった秘密警察の弾圧のもとで命を落としたことをわれわれは忘れてはならないだろう。

田代氏は、結論として〔ポパーは〕「……マルクスをスターリンの源流としたため、マルクスの真意をつかめなかったのでしょう」と述べているが、ヒストリシズムこそが害悪の中心にあったことをまったく理解していない。しかし、科学が何であるかを理解した人たちは、ヒストリシスト・マルクスを見捨て、同時に日本共産党も見捨てていくことだろう。マルクス無謬論とはきっぱり手を切り、民主主義への理解を深めていかないかぎり、ポパーのヒストリシズム批判に対抗することはできないだろうと思う。

+++

（注1） 筆者は、「書評」であるならば、もう少し書物全体への言及があってしかるべきだと考える。この本の主題は、左右の（簡単に言ってしまうと、プラトンとマルクスの）全体主義をヒストリシズム批判という形で展開し、現在の西洋文明の基礎をなしている民主主義——解職主義的民主主義——を擁護することにある。この大きな主題に対してなんらの論評も加えないのでは、とうてい「書評」とは言えないであろう。じっさい、この点を把握していないから、後論でも触れるつもりだが田代氏はヒストリシズム批判がご自分にも向けられたものであることを理解していないのである。

（注2） 田代氏は、マルクスは人間の能動性・主体性を強調したと言うが、後論で論

じるように、この文脈は、そうしたことなく、たんに反映論を語っているにすぎないと思われるということである。

(注3) ポパーが、マルクスを「人間＝操り人形」論の主張者として解釈しているという田代氏の主張はポパーを正確に読んでいないことを証したてているにすぎない。ポパーは、マルクスについて次のように言っているのだから。「だが、マルクスの経済重視主義を、人びとの精神生活をほとんど重視しない唯物論と同一視するなら、マルクスを完全に誤解することになる。」(『開かれた社会とその敵』岩波文庫版、第2巻上第15章、228ページ。)第15章には、マルクスを二元論者——言うまでもなく、精神と身体との——とポパーが解釈している箇所は多数あることを指摘しておきたい。そして、第15章はまさにここで論じられている【序文の箇所】が登場してくる章なのである。田代氏は、ポパーのマルクス解

釈をきちんと読んでいるのであろうか。

(注4) ポパー自身は、第17章注(7)で、社会革命が平和的に遂行されるかどうかという点についてのマルクスの結論を引いたエンゲルス(『資本論』の最初の英訳へのエンゲルスの序文)に言及して、「マルクス主義によれば、革命に暴力行使が伴うか伴わないかは旧支配階級の抵抗しだいであることを明確に示している。」と述べている。

#### 付記

本稿はもと『現代の理論』のウェブサイト(<https://gendainoriron.jp/vol.38/rostrum/kogawara.php>)に掲載されたものだが、本誌にも転載させていただいた。

2024 年 6 月

日本ポパー哲学研究会会員 各位

日本ポパー哲学研究会事務局大会運営部

施光恒 ([se@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:se@scs.kyushu-u.ac.jp))

松尾洋治 ([ymatsuo@shudo-u.ac.jp](mailto:ymatsuo@shudo-u.ac.jp))

戸田裕美子 ([the.japan.popper.society@gmail.com](mailto:the.japan.popper.society@gmail.com))

## 日本ポパー哲学研究会 第 34 回年次研究大会のご案内

この度、第 34 回年次研究大会の詳細が決定し、以下の要領で開催することとなりましたので、ご案内いたします。今回も前回に引き続き、対面方式と zoom によるオンライン配信を併せたハイブリッド方式での開催となります。発表者の報告の要旨は事前に発行予定の『批判的合理主義研究』Vol.15, No.1 に掲載の予定です。今年は、AI と認識論についてのシンポジウムを開催する予定であります。非会員の方もご参加いただけますので、お誘い合わせの上、奮ってご出席のほどお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

日 時：2024 年 8 月 3 日（土）10：30 開始

場 所：明治大学和泉キャンパス（ラーニングスクエア 4 階 401 教室）

※オンラインで参加される場合、以下にアクセスし、パスコードを入力してください。

<https://zoom.us/j/96396677250?pwd=eDA5RnZUTC96T3FwQnN6S1FQRXB3Zz09>

ミーティング ID: 963 9667 7250

パスコード: 023549

出欠連絡：以下の URL（グーグルフォーム）から出欠のご連絡をお願いします。

また、正会員の方が欠席の場合は委任状が必要となります。このグーグルフォームから出欠連絡と同時に委任状のご提出ができますので、ご回答の程、よろしく願いいたします。

**出欠登録および委任状の提出：<https://forms.gle/jZhkfvURSgd9DqJu5>**

※ 非会員の方がオンラインで参加を希望される場合、上記の URL を直接お知らせにならず、事前に事務局大会運営部（戸田裕美子：[the.japan.popper.society@gmail.com](mailto:the.japan.popper.society@gmail.com)）までご一報下さいますようお願いいたします。その際、出席希望の非会員の方の「氏名」「所属」「メールアドレス」「電話番号」「住所」「ご紹介者の氏名」をお知らせください。Zoom の URL など、改めてこちらからご連絡させていただきます。

※当日、Zoom の操作にお困りがありましたら、事務局大会運営部（戸田：070-8340-8115）までご連絡ください。

※ 大会に先立ち、下記の通り運営委員会を開催いたしますので、運営委員はご参集ください。

◎運営委員会：12：00～12：55（ラーニングスクエア 4 階 407 教室）

## 第 34 回年次研究大会プログラム

**受付** 10時15分～

### 【自由論題】

報告① 10時30分～12時00分（40分報告、50分質疑応答）

岩木 信喜（聖学院大学教授）

「学習におけるエラーの働き：記憶の実験心理学からの示唆」

### 【お昼休み】 12時00分～12時55分

（運営委員会：ラーニングスクエア407教室）

### 【シンポジウム】 12時55分～17時00分

「AIと認識論：技術・知識・社会の共進化」

司会解題 12時55分～13時00分

徳丸 夏歌（立命館大学教授）

報告① 13時00分～13時40分（40分）

蔭山 泰之（日本IBM）

「生成AIと世界3」

報告② 13時50分～14時30分（40分）

永島 秀文（TUV Rheinland Japan）

「生成AIを理解できるか？」

報告③ 14時40分～15時20分（40分）

宇佐美 誠（京都大学教授）

「法的シンギュラリティ」

質疑応答 15時30分～17時00分（90分）

### 【会員総会】 17時15分～17時45分

### 【懇親会】 18時30分～20時30分

\*懇親会は会場の近隣で実施予定ですが、場所などの詳細は当日お知らせします。

シンポジウムの趣旨：近年、生成系 AI の出現など、人工知能技術は著しい発展を遂げつつあり、人々の働き方や消費の仕方のみならず、社会や制度、知識のあり方をも大きく変容させようとしています。AI 技術が進化しつつある時代にあって、知識や社会、制度はどのように発展していくべきでしょうか。ポパーは『歴史主義の貧困』において、社会改革は小さな改良を試行錯誤的に積み重ね、漸次的に行われるべきであるとする、ピースミール社会工学 *piecemeal social engineering* を提示しました。ビッグデータを活用し、新たな知のあり方を示す人工知能が出現した世界にあって、社会や制度はどのように改革されるべきでしょうか。本シンポジウムでは、法哲学者であり、AI についての著作もある宇佐美誠氏、データサイエンスを扱うエンジニアである永島秀文氏、哲学者でもあり、技術者である蔭山泰之氏の三者を迎えて、望ましい技術と社会制度の共進化について議論します。

交通案内：明治大学和泉キャンパス（〒168-8555 東京都杉並区永福 1-9-1）

### 【最寄駅からのアクセス】

京王線／井の頭線 明大前駅（駅番号： **KO06** ・ **IN08** ）下車徒歩約5分

#### ■京王線

新宿駅から特急・急行・区間急行・快速で2駅目（約7分）、各駅停車で3駅目（約10分）

#### ■都営新宿線（京王新線直通）

〔快速（橋本行）〕新宿→笹塚→明大前（新宿から4駅目約10分）

〔各駅停車（笹塚行）〕新宿→笹塚（京王線乗り換え）→明大前（新宿から約12分）

#### ■井の頭線

渋谷から急行2駅目（約7分）、各駅停車7駅目（約12分）

吉祥寺から急行3駅目（約13分）、各駅停車9駅目（約17分）





年次研究大会の会場は、ラーニングスクエアの4階401教室です。当日、複数の学会が他の会場で実施される予定です。会場をお間違えないよう、お気をつけください。

批判的合理主義研究（通巻 29 号）

2024 年 7 月発行

本誌は、『ポパーレター』（1989～2008,  
通巻 38 号）を改題し、継承したものです。

発行人 志村 昌司

編集・発行 日本ポパー哲学研究会事務局  
機関誌編集部

〒600-8018 京都府京都市下京区市之町2  
51-2 寿ビルディング 2F

TEL. 090-3842-9002

email:shojishimura@gmail.com

入退会・名簿変更、会費徴収・会計管理に  
関しては、「日本ポパー哲学研究会事務局組  
織・会計部」にお願いいたします。

〒162-8473 東京都新宿区市谷本村町 42-8  
中央大学大学院法務研究科 富塚研究室  
2826 号

tel. 03-5368-3661

fax. 03-5368-3630

e-mail h00370@tamacc.chuo-u.ac.jp